

野馬臺詩國宗

~~D~~  
1091

逍遙文庫  
文庫6  
1610









野馬臺の文八梁

の禪僧寶誌和尚

作所之室誌姓は

朱氏金城の人事

高僧傳不出昔時

室誌行道の日記

忽然として來て

語ると舊より相

識するが如く女去

まハ一女來り如斯

始定壤夫本宗初功元建

終臣君周枝祖興治法主

谷孫走生羽彙成終事衡

填田魚膽翔世代天工翼

孫子動戈葛百國氏右輔

昌微中于後東海姬司為

白失水寄胡空為遂國喧

龍游窘急城土茫茫中鼓

牛食食人黃赤與丘青鐘

腸鼠黑代雞流畢竭猿外

丹畫後在三王英稱犬野

水流天命公百雄星流飛

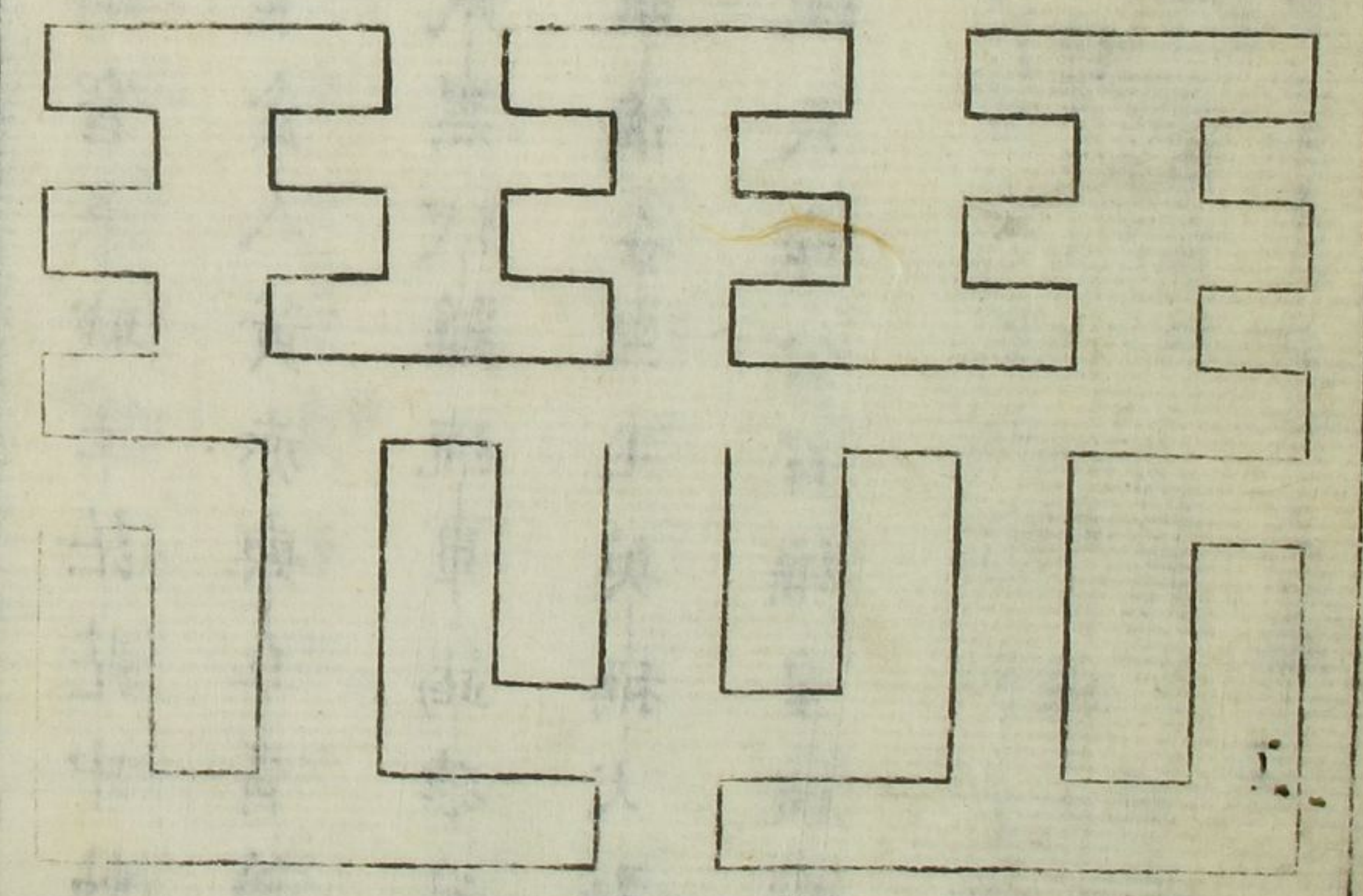
まろと一十八人  
皆因の終始と云  
和尚恠て十八人の  
女紙以て字と作  
まハ則倭の字と  
なほ仍て倭國の  
神ろとて城知於  
彼女の言一語て  
一十二韻の詩と作  
將來小賂を日本

首是より讀らる東海姬氏國と野引乃  
通りに北茫茫遂為空し尾是めを讀畢之  
國字附末小あま見合ふ心登り



の識文之吉備大臣  
 武帝以前是と読  
 小日頃祈念する本  
 邦和州長谷の観音  
 蜘蛛と現し絲と受  
 て讀み梁の誌公ハ  
 是觀音大士みして  
 自ら倭国の識文  
 城作を疑も知は  
 應うと云云

蜘蛛を糸を曳く圖



世傳曰往昔日本大  
 唐貢と奉其使と遣唐使と云人王  
 四十五代聖武天皇は御宇宰相安倍仲丸遣唐使とて官物  
 貢ば此時異朝の天子と梁の武帝と云官物の微少るを忿て仲丸  
 と攻め陳じて云我萬里の波濤を離れ遠旅の客とるれ數の賊室  
 城携て願ハ皇帝怒と省て後度の入貢待た武帝忿せり其  
 仲丸と荒原に藁小殺さる一説高樓に餓死せしむ其灵魂悲恨と青天上昇て鬱  
 陶の赤鬼と成動とれハ帝の近く慨恨を爲と其次の遣唐使吉備  
 大臣之此時仲丸が魂來告て云我ハ仲丸之官物の微少み仍て殺と其  
 冤深し故亦鬼と成荒原に住て日本を慕ふ熟先事ハ思ハ  
 紅淚連々と君も又責らば我是ハ惻隱故此事公ア告と

野馬臺

三



吉備公明朝泰内一官物試獻さる帝又官物の微少と称して吉備  
公責んと然然とも國の法めて答ぬ死と殺る其才能と試て達せら  
者ハ殺と是あ於て巧議て日本に圍基碁知るる吉備公に圍め  
勝んハ戮はとと百官皆吉備公の萬死試思其夜三更の頃鬼又  
來公に告て云君明朝碁局に勝んハ忽殺せん公愕て我未圍碁  
試知ら其法如何鬼が云夫碁局ハ盤面四九三百六十の目黑白の小石  
三百六十箇有て一歳の中數に配と黑白ハ上十五日の月は白光と下  
十五日の月の黒魄に象は是と以互に盤面小置て兩目相續水生  
と續る死と云也教公と鬼の脊小負て紫宸殿より上り  
通夜圍碁と見せむ明日公試召て碁と圍しる公竟小勝て

死試免於次小武帝又議て昭明太子作る所の文選と與へ讀と能  
んハ殺せんと其夜又鬼來て云帝も此謀有帝常に文選と  
好で讀め公今宵我の從聞多とて公と背上に負帝座迫く隠て帝れ  
讀試聽しむ因て吉備公明日是と讀得て免る第三に亂行不同の  
文と作て公に讀しめんと宝誌和尚の命せらる此僧神に感と有て  
野馬臺の文と奉於學士群集して讀し其理と知と五言十二韻百  
二十字扶桑の讖文也鬼又告て云此般の謀も善しと我本邦の神  
佛に祈て求めると云畢て去公大に驚懼と日東小向て頼拜經首  
て伏て云冀ハ佛天の加被力と以一字一言滞なく誦めると天小仰地小俯  
血泣懇禱の妹に公常に和州長谷寺の觀音試信と此時觀音大悲分



身化と雷の蜘蛛と現公と救ふ明日殿上此書と讀に文字  
 紛亂義理辨難るれ意已に腦愁ふ時一蜘蛛下來東の字に  
 落漸歩小絲曳其行蹟因て是公讀に暴然として開明之公  
 畢讀得て唐人皆歎美以吉備公爰に於て萬死出でて恙歸  
 朝とて成得たり大士の感應可貴可敬と云吉備公飯朝の後此  
 書成秘して傳て後代此文ありて讀ものる五十一代桓武天皇の御  
 時野相公小野岑守の子勅して讀めらる始克が竟の長谷寺に  
 詣りて三七日祈誓以大士又應感の化身蜘蛛と現とて誌め是  
 より本朝盛に行きまはる故に觀音の悲願愈著此文と稱して  
 日本の未來記と云

蜻蛉を野馬と云臺國と云意之日本國の形象蜻蛉小似り又  
 云日本最初小生る國大和之此故小日本の總名も大和と云則野  
 馬臺之莊子逍遙遊の篇小野馬也塵埃也云春日澤中の  
 遊氣野馬の馳る如くと云陽燄是之以て野馬臺の出所と云非之  
 字の四聲韻字ハ兒童の分辨難きところまじり毛抄の因に  
 誌すもの工切終公雄中空東宗公翔昌賜陽城庚

東海姬氏國 百世代天工

唐より東の方北海有姫氏の國之姫姓ハ后稷小出て周も則  
 姬姓之周の祖先呉の太伯日本に來て國と關之姫氏の國  
 と云又一説小宗唐天照皇太神女體小在す由姫氏の國と  
 云姫ハ婦人の美稱之百世ハ大數と擧て云天神七代地神五



代の時民と理治の六人意よあふげ天地の造化天の工と云の  
り百世の後其天工に代て人王世小出で民と治政は執行の

# 右司為輔翼 衡主建元功

神代は津速産靈神の孫天兒屋根命高皇産靈神の子天  
太玉命二人天照太神の勅に仍て左右の臣として輔翼て政と成  
の神武帝東征して長髓彦の如き命に逆ふ者と征伐して  
国必治の時も又彼二神の子孫天種子命天富命左右輔翼  
の臣より右司と云て左の字も兼るは衡主ハ用明帝の皇子聖  
德太子衡岳の惠思大師の後身として衡主と云主ハ崇る詞太子  
ハ三十四代推古天皇の朝に攝政となり 冠位十二階と定め位の高  
卑當色の絹衣以て冠を縫せて諸臣に賜ふ日本冠の權興り

元ハ大の意聖德太子執政  
大なる功と建めよと云る

# 初興治法事 終成祭祖宗

聖德太子初興十七箇條の憲法は定り國は治るは事と興  
終は先祖宗族の祭祀は成り本と忘るは是に教へ示しあ  
論語も終は慎遠を追ふハ  
民の德厚し歸すと見へ

治法一本作和法

# 本枝周天壤 君臣定始終

君ハ本之臣ハ枝之天壤ハ壯子也出て天地と云は同かあつちと  
訓を上下和睦し子孫天地に周く繁榮まると君ハ臣と愛

予馬書



下ハ上成敬あがく各おのづから巳い當職あて安やすト連差たがぶら終しま始はじの如ごとく  
に定さだる皆みな太子みかどの功いさと云い聖人せいじん始はじめはるる克終よくしゆうあると鮮あま宜なりり

# 谷填田孫走 魚膾生羽翔

谷たにハ身みく賤者せんしやの譬諭ひよこ田いハ穀用こくようのあ敷所あきところ貴人きじんハたゞ其貴人きじんの子  
孫そん賤者せんしやの爲ために逃走たうそう之魚膾ぎょがいを賤せんさるもの位くらい成なり竊ねそる時とき小乘せうじやう之説せつ  
小天智帝せんとしの御子みこ大伴おほともの皇子みまろ亂みだれ起たり陵谷りやうこくの變へんあると云い天武  
帝てんぶ大伴おほともに襲おそはるる再またび位くら復たがゆるハ膾炙がいかハ製つくる魚鳥ぎよの  
羽はと生なじ飛翔とびかたむけふらねる云い天智帝てんし始はじめはるる御位みくらと御弟みせ天武  
小讓せうじやうあると有あり又また後のちに御子みこ大伴おほともの皇子みまろ成なり太子みかどと定さだめあると  
天武てんぶ薙髮はげましく芳野よし小隱せういんあると天智崩御てんしやうの後のち大伴おほとも謀まて  
天武てんぶと失人しつじんとあると美濃國みのくにハ道みちあると高市たかちの皇子みまろ不な破やぶる

關せき小陣せうじんして東國とうこくの通路つうろと塞ふさぎ吹負ふきお大將だいしやうとして江州かうしゅうの都みやこ攻せめ  
あら大伴おほとも戦員せんゑんて勢田せいでんめて討死うちじは是こゝ天武即位てんぶあると是こゝ四十代しじゅうだいの帝てい

# 葛後干戈動 中微子孫昌

葛くわハ藤ふじの葛藤くわふじ姓せいの隱語いんご之後のちハ藤原氏ふじのら後武智ごしち九弟くち子こ惠ゑ  
美押勝みおしかつに至いたり干戈かんごの騷亂さうらんあると云い藤姓ふじせいハ天兒あまのこ屋根命やねのみこと以下以下子  
孫そん代々だいだい朝廷てんていに扶翼ふよくをとり二十三代じゅうさんだいの孫そん鎌子かまこ入鹿いらかを討うちて功こう有あり  
由よし藤姓ふじせい以もつ賜たまひ名なも鎌足かまたりと改かむ其その后のち押勝おしかつの時とき孝謙帝かうけんていに寵ちゆう  
を得えば帝てい又また引削ひきけの道鏡みちかがみを愛あいせらるるを恨廢帝おんぱいに勤こゝろめて  
謀ま叛はんと起たり竟つひ小敗軍せうたいぐんハ帝ていハ淡路たんろハ流ながるるも押勝おしかつハ誅つゐせらるる  
此こゝ後のち藤氏ふじせい衰おとろへるる中なかハ微みなりと云い五十六代ごじゅうろくだい清和帝せいわてい  
の朝あそ小先帝せうせんてい文德ぶんとくの遺詔いせうめて藤原良房ふじのら帝ていの外祖ぐわいそと成なりて



攝政と成後忠仁公と謚と是之爾來彼子孫連綿  
として又重職不任ざる由子孫昌と云れり

# 白龍游失水 窘急寄胡城

白、庚の色龍ハ辰之四十六代孝謙女帝天平十二庚辰の誕生  
めて此帝在位嬪行度々道鏡と寵しあふて太過り此故  
小九族親族諸臣朝せ民の望み失は是白龍の故に游遊て其  
憑所の水城失ひる等一窘急ハ迫困之都と捨て道鏡の跡を  
慕ひ下野の薬師寺へ下りひと胡城へ寄ると胡の字ハ帝  
城に對して云一説に帝と龍に比とる通例より白ハ赤に對して陰之  
孝謙帝女主也  
白龍と云り

# 昔雞代人食 黒鼠食牛膓

黄ハ巴の色雞ハ酉之平親王將門寛平元巳酉小生と野洲相  
馬小内裡と構へ百官と立東八箇國小自立王と潜稱を人  
に代て食ふの謂之黒ハ壬の色鼠ハ子之平相国清盛長承元  
壬子に生と保元平治の亂小源氏と戦ひ爲義以下討亡て  
威と海内に振ひ官太政大臣小至り女と高倉帝の中宮よ入ぬ  
建禮門院是之後白河帝ハ鳥羽に押籠高倉帝と新院と稱し  
政事皆清盛の手に出四海と腦亂せめ君臣の禮と亂り  
祭祀と奉せバ已其肉と食ふ之牛膓ハ異國祭祀小獸肉と  
用と假て云日本も佛教入る  
前ハ都て祭よ肉食と供せし



丹水たんすい流盡りゅうじん後のち 天命てんめい在あ三さん公こう

禁庭きんていと丹墀たんていと云丹水たんすいの帝王ていおうの恩澤おんたくに譬たとふ丹陽たんやうの赤色せきしき水みづを潤澤うるさく之の壽永じうえいの亂らんに安徳あんとく帝てい入水いすいのひて後王道こうだう衰弊さいへい政諸侯せいしよこう

より出いと天てんの命めい三公さんこう不在ふざいと云異朝いしやうの太師たうし太傅たうぶと三公さんこうに日本にっぽんの太政大臣たうせいだいじん左大臣さだいじん右大臣うだいじん之の義朝ぎしやうの三男さんなん右兵衛うべゑ佐頼朝さよりしやう

義ぎ旗はた翻ひらして平家へいけと傾かたむけ天下てんか平治へいぢせの大功たいこう母はは依よて日本にっぽん惣追捕そうしゆほ使し賜たまはる以來いらい天下てんかの政道せいだう再び天子てんしに復かへさるるれハ

此三公さんこう頼朝よりしやう頼家よりけ實朝じつしやうの三卿さんけいみも通とほる心こころのえり

百王ひやくおう流畢りゅうへい竭くつ 猿犬えんけん稱なづ英雄いゆう

百王ひやくおう代々たいたい流畢りゅうへいく竭くつて後のち申まを戌しゆの歳とし人ひと出いて威い四海しやうかい加かん

山名やまな右金吾うごんご入道にゅうだう宗全むねぜん應永おうえい十甲じゅうか申まをに生なま細川ほそがわ右京うぎやう北

勝元かつげん永享えいかう二庚にこう戌しゆ小生せうせいと英雄いゆうの名な城じやう称なづせと應仁おうえいの大亂たいらん有

英えいハ草そうの精秀せいしゆる於おのの雄ゆうハ獸けしの群ぐんに勝かまら云い假かりる人ひとの技わざ

星流せいりゅう飛野ひの外がひ 鐘鼓しゆこ喧な國中こくちゆう

伏羲ふぎ氏しの古管こくわん天てんの恒星こうせいを以もて萬民ばんみんの諭ごんふ星流せいりゅうて野外のがひ小飛せうひ

亂らん試し憂ゆうて天下てんかの庶民しよみん野外のがひに道みちを走はる之の國中こくちゆうの中ちゆうを責せ鐘しゆ攻こう鼓この聲こゑ喧なと戰亂せんらん甚しん極ごく於おの謂いなり



青丘與赤土 茫茫遂為空

青丘、新羅の國、松樹多く、青々として、其南に當る日本國也。南方丙丁の色と假て赤土と云二國俱に終小荒々  
荒野とねんんと云又一説に末世多く野原墳墓と  
築を青丘と云田畑をあふむ流ハ赤土と云又一説小是も應仁の  
亂小畿内焦土とあり或ハ青州と  
生じよと云荒々ハ廣々をばと云

辨正

野馬臺の詩ハ本朝一人一首卷の九に出て人口に傳  
稱さるゝ舊し其解の如く述る所のごとく傳來まり然ども

不稔孟浪の作を於てハ學者皆知る所之其一ニ辨論左  
の如く

四十五代聖武の御時仲丸遣唐使として梁の武帝に  
見おとあまを梁の時我國ハ二十六代武烈帝御治世あり  
聖武帝の御時異朝ハ唐の玄宗帝やて二百餘年差  
あり

遣唐使の始ハ三十四代推古帝の御時より此事ハ我朝  
の史按むるに四十二代元正帝靈龜二丙辰八月多治  
比の縣守遣唐使より藤原宇合副使より此時下道眞  
備 吉備公のとき 阿倍仲磨 時 學問の爲入唐此以前



を遣唐使のまども 梁の武帝の世に未有之推古帝の  
御時彼国ハ隋の煬帝ハ當於と始と最仲麿の年歴ハ  
諸書紛々をり 仲九吉備同時入唐のことハ史に見へり  
王代一覽和漢年表等に出所大同小異也

○宦物微乏之とて仲九弑殺子細く吉備公ハ国法  
咎おた弑殺さるると二ハハの難事ハ計らるハ如何日本  
罪おた仲九と殺さる其不禮ハも問ど次度の唐使と渡  
如く柔弱の国にあらば本朝の威武ハ異域も知る所  
我國ハ不敬とありとてハ聞か人の能ハ生質ハ法不  
才の人とて是と殺國法あらんや況贈物の多寡と心と

使臣好悪とる卑劣ハ夷狄の王よりたえらるるや

○仲九と彼國めて傳と和漢の記録見たり仲九彼土に留  
學せしも明之近く人の知る唐詩五言排律に秘書晁監  
日本へ還るに送る王維が詩ハ仲九玄宗帝ハ時秘書監の官  
本邦へ歸ると有(其送別の詩より仲麿ハ後壽と以て唐土  
小卒とて必定るに荒原の赤鬼と成と浮屠氏人と惑  
ひる僻説之唐書列傳二百二十ハ曰朝臣仲湍易姓名曰朝衡  
是仲九之又晁衡とも書きたり

○日本和州長谷寺ハ觀音吉備公の懇祈より仍て一夜二千  
里の海に涉り彼地ハ蜘蛛と現れ出るも誠心の感格ハ左



あふんまじと自在なること赤鬼又何ぞ神通と以て讀む哉  
教がらや

○五十代桓武帝小野の篁に命じて野馬臺と讀みあふふ  
能くして又觀音小祈ると云も不審篁は五十二代嵯峨帝の  
弘仁年中仕て参議に至り五十五代文德帝仁壽二壬申十  
二月二十日卒と有桓武帝の御時といふ觀音再度  
も蜘蛛と現る頗る自在なるや可笑

○梁の宝誌和尚此文を作ると云も附會の説は如何ぞ殊  
邦千歳の後と豫免知人や聖德太子天王寺の未來記等  
の妄説に擬して杜撰せよもの明く又宝誌は聞ゆる碩德の僧

まじハ華麗の文は作出と周興嗣が次韻せし千字文の如ふ  
至むは此野馬臺の文僅一百二十字中を流三字百二字  
終二字中二字後二字天二字国二字水二字孫二字代二字爲  
二字何ぞ斯不自在なるや文小同字或諱とあはれはるのいふ  
拙み似たり文勢母於ても一句の感吟を處無を作者  
和漢の歴史城子細めせに強て兒女子城迷む妹と或日  
本ハ七代五代の神城祖と自他各神の苗裔より然る  
姫氏の国と云く異國の孫と始は聖德太子と贊美し  
ころは全浮圖氏の手に作せり其以下大伴の亂孝謙女帝  
の穢行より相国清盛三公等の句不當の誣言多し



孝謙帝城庚辰小生まのふと云て白龍と云るも養育養老  
三巴未の生まのひ神護慶雲四庚戌八月四日五十二にて  
崩御

清盛成子子生たてて黒鼠と諭ふ元永元成  
成小生ま養和元辛丑閏二月四日六十四にて逝去是と  
以其他年歴の差違成察とす

青丘城新羅の事と云扶桑未來記と云野馬臺の文  
小他邦の預る所なる未に鐘鼓國中に喧とい結句は茫々  
とて遂に空とるると記不善の語と云此作者室誌和尚  
の名ハ假若日城の人多ク國朝と憚る昏愚の罪人とす也

安倍仲麻呂傳

安倍 昔ハ師附と云しと 新撰姓氏錄に 孝元帝の

皇子大彥命の後とあり父祖取見たり中務太輔船守

の子と云又船守ハ同船せし人の名とも云實證これなり

灵龜二年 唐の玄宗 開元二年 八月多治比真人縣主等遣唐使

の時仲磨と留學生として入唐せしめあ仲磨朝臣の

朝と氏と一名と朝衡と改む晁衡とも云り 晁音 朝と舊唐

書新唐書に見たり一説に使と奉して一と云 日本

父母に歸寧し再唐に入安史が亂に逢て終に歸らざる

或ハ儀王に友たり或ハ新羅に在書と附して故郷の新羅日



孝謙帝試黃衣の主人と云ふこと  
野馬臺  
十三

送とほまきも再入唐と云ふは續日本紀に天平勝宝蓮  
唐大使藤原朝臣清河卿副使以下入唐其復命の  
時晁衡も本邦に歸らんとして明州の津小舟出ると時  
別斌惜之詩を贈る王維が詩ハ唐詩選排律に出色信詩  
ハ文苑英華に出此時海の面に月こけがみ見て我國の  
神代より斯歌と詠とて

天乃原布利佐計者禮波春日奈留三笠乃山尔出月加毛  
古今和哥集羈旅の部に入詩も作らざりしが文苑英華に出  
既ハ唐土と去て大洋に艦と解らる暴風荒波の爲に唐土へ  
吹反る仲滿溺死すと聞しと李白哭晁卿衡詩

日本晁卿辭帝都征帆一片繞蓬壺明月不歸沈碧海  
白雲秋色滿蒼梧と作ら然ハ仲滿恙多くと再唐帝  
ハ奉仕と清河卿も竟に唐に薨と云ふ四十六年留學して官秘書監より左  
補闕と経て左散騎常侍鎮南都護小至侍從の臣より唐書景  
出薨して一説ハ七十歳と云開国公に封じ潞州大都督に贈りて日本  
を贈官正二位と賜し光仁帝室龜十年唐代宗に五月前學  
生阿倍朝臣仲磨唐に在て亡本朝の家口偏に乏しく葬礼欠  
ことほり勅して東絹百匹白綿三百疋と賜と續日本紀に見ゆ  
仁明帝養和三年唐文宗開成元五月附聘唐使贈遣往歲卿本朝命  
入唐使並留學等在彼身没者八人位記以慰幽魂仲



磨其一人也續日本後紀

詔詞曰

故留學問贈從二品安倍朝臣仲滿大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡可贈正二品身涉鯨波業成麟角詞峯聳峻學海揚漪顯位斯昇英聲已播如何不救莫遂言歸唯有檢天之章長傳擲地之響音追貴幽壤既降於前命重叙崇班俾洽於命詔和漢の記録に顯然として其正しきの斯の如く此外班の書に見ゆる如多しとりとも取に足らざる

以上述る所先哲の論辨少く臆見致交々識之世小行

る野馬臺の詩虎關禪師の序と云傳るわり或疑之云

虎關師を又文雅の名有此序の如く他文小見ざる拙之然を

本文小室誌城售序文小虎關城偽ると左をあらん

干岩寛政九龍集丁巳孟春穀旦

東武高井伴寛思明選并書

文政五壬午季夏再刻





跋

大石喜章撰

蜜不舐不知其其薑啞之始知  
 其辛物皆然矣如詩書不味之  
 何知其美惡乎外兄蘭山螢雪  
 有年著述頗多嘗因書肆需解  
 野馬臺之文而句句都巨細至  
 辨謬誤可謂詳明焉童蒙於是  
 始知薑自不可混蜜而已



今體 清陸式王著 宋詩選 小本二冊	溫公 中山 宋三家詩話 全一冊
宋一大家絕句 全一冊	陸放翁詩話 全一冊
同箋解 全二冊	徐而庵詩話 全一冊
廣二大家絕句 全一冊	浩然齋詩話 全一冊
宋詩清絕 全一冊	寬齋如真 詩佛五山 今四家絕句 二冊
題畫詩類抄 二編 小本二冊	五山堂詩話 全十卷
西湖竹枝 小本二冊	寬齋先生著 談唐詩選 小本一冊
三体唐詩 合刻 嗣出板元	江戶日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛



早稲田大学図書館

011488583834